

独学だと見落とす!

攻略! 8つの弱点

ライティングの壁を越える

日本語で考えた文章をそのまま英文にしても、読み手にはこちらの意図したとおりに伝わらないことがままあります。

時には誤解を与えたり、相手の気持ちを害してしまうことも……。

それを防ぐには、英文を実際書き、ライティングのコツをよく知るネイティブに添削してもらうのが一番です。

オンラインで英文添削を行う「英語便」は、学習者が英文を書く際に間違いやすい点をデータに蓄積。

そこから見えてきた学習者の英文ライティングによくある「8つの弱点」を克服へと導きます。

さらに、ビジネスメールと英検1級ライティングの練習課題で実際の添削例を公開。

つまづきやすいポイントを知り、今後の英文ライティングに生かしていきましょう。



執筆:「英語便」スタッフ+ネイティブ講師

ネイティブ添削で学ぶ英文ライティング「英語便」は、2005年にサービスを開始したオンライン学習講座。英文日記からビジネスメール、アカデミックな内容まで添削を行っている。英字新聞のライターやジャーナリスト、大手企業のビジネスクラス担当講師、英検の面接官などが添削を担当。 <https://www.eigobin.com>



読み手に伝わる英文を書く難しさ

一口に英文ライティングと言っても、ビジネスメールからアカデミックエッセーまでさまざまなものがあります。共通して言えることは、**日本語の文章を和英辞典や文法書を駆使して英文に変換しても、読み手にはそのまま伝わらない**ということです。日本人および日本語の発想で書かれた英文は、英語のネイティブスピーカーにとっては時に不自然で不明瞭なことがありますし、誤解を与えてしまう場合もあります。言葉は文法だけでなく、文化や慣習に密接に結びついています。たとえば、We had a party. という英文を見たときに、日本人の多くはレストランや居酒屋、または特別な会場で開かれるパーティーを想像するかもしれませんが、ネイティブスピーカーの多くは友人や知人の家での集まりを連想します（日本人が使うhome partyは和製英語です）。

このように、文章の読み手の住んでいる国や習慣が違っていると、同じ文を読んでも想像するイメージが異なります。相手が普段どんな生活をし、どんな考え方をするのか理解していないと、読み手に届く文章を書くのは難しい作業になります。ですが、海外の文化に直接触れる機会がない人でも、いくつかの重要点に注意することで、こうした問題をクリアし、読み手に自然に受けとめてもらえる文を書くことができます。



英文ライティング3つのコツ

ネイティブ添削で学ぶ英文ライティング「英語便」では、これまで12年間、日本人が書いた英文を数多く添削してきました。そこから日本人の英文ライティングの弱点が見えてきました。そうした克服すべきポイントをいくつか挙げながら、英文を書くための3つのコツを述べたいと思います。

①まずはじめに、**文法・語法はライティングの基本**です。時制や三人称といった基本文法は多くの日本人が正しく使っていますが、冠詞や名詞の単数・複数の使い分けなどは、日本語の概念にないため、ルールの丸暗記で使っている方も多いと思います。しかし、文法的に正しくても思ったとおりの意味では伝わらないこともあります。冠詞の例ですと、He is a manager in the department. と不定冠詞を使うと、「彼はその部門で何人かいる管理者の1人」という意味になりますが、定冠詞を使ってHe is the

manager in the department. とすると、「その部門を管理している人＝部門のトップ」という意味になります。「**冠詞や名詞の単数・複数の使い方などによって、相手に伝わるイメージが変わってしまうかもしれない**」ということを常に意識して英文を書く必要があります。

②**文章の構造 (structure) も重要**です。日本人は「起承転結」の順で書く人が多いと思いますが、西洋ではまず「結論はこうです」と言いたいことをストレートに述べ、続いてその理由を続けるスタイルが一般的です。短い文では大きな問題は生じませんが、論文や意見を述べるエッセーが日本語の思考順序で書かれていたりすると、英語圏の人には「論点が見えない、非常に読みにくい、何がいいいいのかわからない」と思われてしまうこともあります。**日本語で思いついたことをそのまま英語にするのではなく、構造や順序を意識しながら書く習慣を身につける必要があります**。ライティングの構造については市販の書籍で学べますし、英検やTOEIC SWテスト、TOEFLなどの資格試験のエッセー問題で学習するのも効果的です。

③最後に「**相手に合わせたロジックで書く**」ことを心がけましょう。読み手は自分の常識を基に内容を理解しようとするため、誤解が生じることもあります。冒頭の例文 We had a party. という1文に日本人とネイティブスピーカーで異なるイメージを持ったとしても、場所の説明や集まった人々の様子、パーティーの目的などの補足事項が書かれていれば、書き手と読み手が同じイメージを共有できます。**常に読み手の立場になり、必要があれば日本特有の物やシステムに関しては説明を補足すること**も考えましょう。

海外に向けて英文を発信する人は、さらに**言葉のトーン**（失礼な言い方になっていないか）、**単語のニュアンス**（たとえば、同じ「要求する」でもdemandは命令に近い強い要求、requestはカタカナの「リクエスト」に近い意味）などの知識も必要です。ですが、相手に通じる英文を書くには、まずは「**文法・語法**」「**文章構造**」「**ロジック**」を抑えるようにしましょう。

本特集では、日本人が間違いやすい8つの項目と実際の添削例を紹介します。英文を書く際にぜひお役立てください。

1

単数にするべきか、
複数にするべきか

» これを英語にすると…?

私にとっては、ほとんどのタイ料理は辛すぎる。

🌸 日本人の英文例

Most Thai foods are too spicy for me.

🌸 ネイティブの添削

Most Thai foods are **food is** too spicy for me.

解説 foodは可算名詞としても不可算名詞としても使われます。可算名詞と不可算名詞の両方の使い方がある名詞は、「**一般的な総称として使うときは不可算名詞**」を、「**特定の事や物を示すときは可算名詞**」を用いると意識する必要があります。

例文では、トムヤンクンやグリーンカレーなど特定の料理ではなく、タイ料理全般を指しているので、不可算名詞のfoodを用いるのが適切です。不可算名詞は単数扱いになるので、動詞の一致にも注意しましょう。

foodは、食べ物の個々の種類を示すときには可算名詞扱いとなります。

例 My doctor advised me to avoid fatty foods.

(医者には私に脂肪分の多い食べ物を避けるように言った)

fruitにも可算名詞と不可算名詞の両方の使い方があります。fruitは、The best fruit in my neighborhood is from the farmer's market. (近所で一番おいしい果物は、生産者の直売所のものだ) のように、果物一般を指すときは不可算名詞として使われます。

一方、可算名詞として使われるのは、果物の個々の種類を指すときです。

例1 The acerola is a tropical fruit native to Latin America.

(アセロラは南米原産のトロピカルフルーツだ)

例2 The stone fruits are in a separate display.

(数種類の核果が別々に陳列されている)

2

andとor どちらを使う?

» これを英語にすると…?

私はこれまでにアジアや南米の多くの国へ行った。

🌸 日本人の英文例

I have been to many countries in Asia or South America.

🌸 ネイティブの添削

I have been to many countries in Asia **and** South America.

解説 「AとB」はand、「AまたはB」はorを使うという理解は一般的には正しいのですが、日本語と英語の考え方は少し異なります。日本語の「AとB」と「AまたはB」の意味の境界線と、英語のandとorの意味の境界線には、若干のずれがあるので。

例題の「アジアや南米の多くの国」のように、「AやB」と日本語で表される場合、日本人はorを使うことがよくあります。しかし、**orを使うと「AかBのどちらかは排除される」というニュアンスが生じてしまうことが多いので注意しましょう。ある事柄や出来事が同時に存在したり、発生したりしていなくても、「両方が存在している／発生している」場合はandを使うのが適切です。**例題の場合、「アジアや南米の国」を同時に訪れたわけではありませんが、両方を訪れているのでandを使います。

もう一つ、例を挙げます。「彼はジャズやクラシックを聴きます」の英訳として正しいのはどちらでしょう?

He listens to jazz (and/or) classical music.

この場合も、ジャズとクラシックを同時に聴くわけではありませんが、「どちらか一つ」ではなく、両方の音楽を聴くという意味なので、andを使います。

同様に、「大学で哲学や心理学を学びました」の英訳は、In university, I studied philosophy **and** psychology. となります。大学で哲学と心理学の両方を学んだという意味なので、andを使うのが適切です。